

平成 30 年 9 月 4 日

# 南の風 280

南部ミニバスケットボール連盟  
会 長 藤原 敬一

オフボールマンのディフェンスについてです。

ディフェンダーはボールマンにマッチアップする時は、誰しもがんばります。なぜならバスケットボールは、ボールを持っている選手が攻撃の起点となるからです。抜かれたり、シュートをされたりすれば即得点につながってしまいますので、「絶対守る。」という気持ちが湧きます。

しかし、オフボールマンディフェンスの場合、『ボール』と『自分の相手』の両方に注力しなければならぬので集中力の持続が難しく、どちらかが疎かになりがちです。

神奈川県中学校総体や関東中学校大会の試合を観ても、オフボールマンに簡単にパスを通される場面が数多くありました。特にボールサイドをカットされボールが入ってしまうと、即得点されたり、数的優位から合わせられたりしてしまいます。

また相手にサイズのある選手（得点源となっている）に、ペイントエリアから対応しようとして間に合わず、上からパスを合わされてイーージーシュートを許してしまうケースもあります。

まず、オフボールマンを守るディフェンス形態から書きます。

①クローズドスタンス      ②オープンスタンス      ③フロンティング

この三つになります。

最近では、2線のディフェンスをオープンスタンスで守るチームが増えました。根拠は、ビジョンが取りやすいことと、『ボールを中心に自分の相手を守る』ことがやりやすい点です。クローズドスタンスは、自分の相手にプレッシャーは掛けやすいのですが、ビジョンが狭くなり、ヘルプやローテに遅れるケースがあります。ですから、『ボールを中心に守る』という観点から言うと、オープンスタンスの方が、ボールの動きに対して、素早く反応できるからです。

オープンスタンスの弱点としては、自分の相手の動きに敏感に対処しない（付く距離があるため）と、ボールサイドをやられてしまうことと、簡単に自分の相手にボールを持たれてしまう（例：ブラインドカットからポップアウトなど）ことです。

フロンティング（従来のフルフロント）は相手を背中で守り、身体をボールマンに向けるやり方です。ポストの守りや絶対ボールを入れさせない時の守り方です。

上記の①②（③は特別な場合）のどちらを選択するかは、チームの実態を考慮して選手と指導者で決めればよいと思います。どれがベストというものはありません。ただ状況に応じて使い分けることは、ミニバスでは難しいと思います。

さて冒頭でも触れましたが、オフボールマンのディフェンスで私が一番気になったのは、サイズのある選手の守り方です。長身者にペイントの中（特にゴール近く）でボールを持たれることは、ほぼ得点につながってしまいます。長身者がエントリーしてくる（フロントコートに入る）時から、フェイス気味について少しでもフラストレーションを溜めるような守り方をすべきです。何となく付いてずるずるペイント入られてしまうことは絶対に避けるべきです。